



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.174
2018.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第20回 ● 「コロボックル風俗考」による革新

考古学が遺蹟・遺物を研究の対象とする性質上、斎藤忠が「日本石器時代文化論」と喝破する「コロボックル風俗考」にはもう一つ今日的に再評価されねばならない重要な側面が認められる。即ち、列島における石器時代遺蹟・遺物の網羅性と分類の体系性を確立するための基礎作業にパブリック・アーケオロジの展開を企図する構えであるが、それには考古学を分かり易く理解できるような効率的効果的な推進の試みが重要で、挿図を工夫・充実させ専門的な用語の啓蒙・普及に寄与する「日本石器時代考古学辞典」としての役割が学史的に改めて浮上する。

ここに至るならば、人類学教室員と同様に各地の市民とも積極的に交流し町ぐるみで遺蹟・遺物を学び考え、新たな発見を考古学の発展と普及に向けた坪井正五郎の一連の学術的姿勢を以て、本邦におけるパブリック・アーケオロジ発祥と言わずして何としよう。

モースの大森貝塚による科学性を遥かに超えて、西ヶ原貝塚の資料観察から導出した坪井正五郎の「分析考古学」は、人類学教室員にも理解を得られないほど専門性の高い品質である一方で、自身で発見した貝塚の人類学教室員に指示した発掘は全盛期を迎え、関東の椎塚貝塚・阿玉台貝塚・福田貝塚や浮島・貝ヶ窪貝塚など、東北では亀ヶ岡遺蹟など、石器時代資料の蓄積が格段に進行するに従い、地域的な遺蹟構成のみに留まらず汎く列島における石器時代の外観を求めべく、モースの動物学からは構想できない人類学考古学としての遺蹟・遺物の全体像把握という新たな学術的使命も誕生したのである。

明らかに進化論の伝道という、近年では構造主義同様の「理論考古学」ではなく、遺蹟・

遺物から環境適応や精神面を含めて往時の生活を風俗(民俗学)として語る「コロボックル風俗考」という総合的な試みは、正に「データ対話型考古学」の構築に他ならない。ここにモースの進化論的動物学故の狭隘性及び表現の職人的な精密性は、新たな人類学からの要求である風俗考(民俗学)により見事なまでに破壊・払拭され、坪井正五郎が「モースは(中略)本来画工だ」と発言したとされる趣意は、決して揶揄などではなく、正に「モノ」から「ヒト」へ、更には「ヒト」から「コト」へ、との学術的欲求・評価に基づく核心をついた本心に違いない。

それはさておき、「コロボックル風俗考」の主役が加曾利B式と大洞式であることは第18回に記した。これは単なる偶然ではなく、列島の石器時代が「同一人民」により構成されることを「類似の形態連携論」として示すための仕掛けであり、大洞式によりコロボックルの出所である北海道と本州を連携させ、西ヶ原貝塚報告では加曾利B1式により更に本州の南北を連携させ、「同一人民」による列島交通の相互関係を示したのである。

「コロボックル風俗考」連載の後半過ぎに発表された「北海道石器時代土器と本州石器時代土器との類似」(明治28年11月)は専門性を重んじ、「土器の形状」と「土器の紋様」に見られる類似を大洞式と円筒上層式の例で示し、その由来を「時を隔てた人民の故意の模擬」か「同時代に於ける当然の類似」に求め、「細工人が手本と成る品物を見て居なければ出来る筈がござりません」との手本共有関係を以て「同一種類の人民の仕業」と収斂させる。ここでは遺蹟の個性は捨象し、石器時代としての全体像を重視し、地域間に

おける遺蹟「總躰の有様」という視点から接近する。

因みに「同一種類の人民」に続き、更に「同一人の細工」にまで絞り込む形態学への展開が加曾利B1式の諸例で示されるが、それは次回を俟つとして、「コロボックル風俗考」の挿図は現代考古学にも耐えうる分析成果と評価すべきで、特に加曾利B式の貝塚文化研究には絶好の深堀用入門書となる。

ここでは本題土器研究の一例としては連載「第四回」で「土瓶或は急須」の形態と機能を解説し、「第八回」で「土器形状」の挿図に組み込まれた福田貝塚の、佐藤傳蔵発掘・報告(明治27年7月)に係る注口付土器に触れておかなばなるまい。

第25図は福田貝塚報告の注口付土器である。山内清男により『日本原始美術I』(1964年)にて加曾利B1式と明解に同定され、『日本先史土器図譜』では「加曾利B式の古い部分は堀之内新形式に近似している」との注意を代表する標本でもある。堀之内2式と加曾利B1式の界線問題は同じ用語を他人が異なる定義として使用するのであれば、学史的に定義された内容を優先・尊重する。草創期や加曾利B2式なども含め、他人による定義の同名改竄が騒がしく面倒な世界である。



▲第25図 福田貝塚の加曾利B1式注口付土器

*巻頭連載は隔月です。次回は太村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「コロボックル風俗考」による革新(第20回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことの始まり(第13回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第167回) 秋田雄也 …3
■考古学者の書棚 『時を盗む者 A THIEF OF TIME』 菱田淳子 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第13回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

4. 石棺の石材(4)

前回までの少々繰り返しとなるが、岡山県内の石棺石材を考えた際、私たちは県内で最も注目されてきた、大形古墳の造山古墳や両宮山古墳周辺古墳で、西の阿蘇山に関わる熔結凝灰岩や、東の兵庫県でも岡山県に東接(播磨)地域の亀山石に遭遇した。しかし、形態として最も古い石棺形態とされてきた、割竹形・舟形石棺が集中した四国香川県、岡山県とは瀬戸内をはさんだだけの近県だが、この香川県(讃岐)の石棺石材、東は火山石・西は鷲の山石の石材による石棺が、岡山県内においては発見されていないかのような記述をしてきた。

だがこれは岡山県下では、最も古くから注目されてきた地域の、一連の古墳に触れてなかったからである。これらの古墳は、岡山県では三本の基本的な河川が北から南の瀬戸内海に流下しているが、その中で最も東に位置する吉井川の、しかも東岸に接する丘陵上に、近接して存在している三基の古墳のことである。

これらの古墳の一つ、全長約100mの花光寺山前方後円墳は1935年に、径50mばかりの円墳鶴山丸山古墳がその翌年に、地元住民によって発掘され、両古墳から石棺が発見された。しかも鶴山丸山古墳からは、蓋に3個の家形や円盤の装飾を刻んだ巨大な石棺が出土し、その蓋に穴をうがって内部の遺物を取り出すという状況だったのである。これを契機に、部分的な調査と保存処置が、京都大学の梅原末治氏らによって実施され『近畿地方古墳墓の調査』二・三(1937・1938)に当時の実態が報じられた。これにより考古学関係者間では古くから、極めて注目され古墳群となっていたのである。

その後、世界大戦をはさみ、また1945年にも地元民により、花光寺山古墳とは互いに円丘部を接した天神山古墳から石枕(現在岡山県博所蔵)が掘り出された。この古墳は120mばかりの前方後円墳とも40mの円墳かとも言われている。石枕は砂岩で精巧な作り、朱で染まっている。伝えられるところでは、この石枕は刳抜の舟形石棺に備え付けられていたようだ。だがこの石棺の蓋は、石室の蓋と共用と伝える。これらの古墳については『岡山県史・考古資料編』(1986年)にも概要がある。岡山県内では周知され注目されてきた古墳であった。

これら三古墳の石棺は現在では見ることは出来ないが、鶴山丸山古墳に関しては、破壊された石棺断片とされる石片を、春成秀爾氏を通して見る機会があった。その試料は目視だけだが、四国の火山石の可能性が強い。またこの古墳の近くで、石室の板状天井石と見られる縄かけ突起を持つ石材も発見されており、この石材も四国の火山石と見てよい。こうした形態の天井石は、四国の火山石使用地域の古墳にも見られるものである。岡山県の東部、吉井川流域圏には、四国東部の石材が、運ばれていたと見てよい。

また四国での刳抜石棺では、東西それぞれの石材製の石棺とも、作り付けの石枕をもつものが多い。しかし天神山の石枕が、四国産の石枕でないことは、石材が砂岩であるため明白である。石枕を持つ石棺は九州にも、日本海側の地域にも多い。

天神山の石枕まだ何処から将来されたかは不明である。

また花光寺山古墳の石棺は組合式石棺で、長持形石棺の祖形とも、垂流ともいえる形態で、短辺外部に副室構造まで持つ。これが他の本格的な長持形石棺製作の、兵庫県播磨の亀山石製であるのか、河内の大和川沿いにある、松岡山古墳の石棺の様に、四国西部の鷲の山石材利用もあるのか…いずれにしても、吉井川東岸地域の豪族達が、吉備の他地域とはやや異なった形で、海上交通により広く各地と結ばれていたことの証明である。

こうした問題は、既に『石棺から古墳時代を考える』同朋社1994年 間壁忠彦著にも記している事であるが、同じ吉備国にあって、この地の近接した前中期古墳期の石棺は、極めて注目される。しかもこの特異な傾向は、後期古墳期にも引き継がれるものだったと言える。

後期古墳期となると石棺利用も急速に各地に広がり、原則的には、地域の石材が開発利用される傾向となる。だがその中にもあって他地域の石材による石棺も錯綜する。

大和盆地の只中でも、地元石材とも言える二上山の白色の凝灰岩による石棺と、かつて河内の大王クラスの棺に用いられた兵庫県の亀山石による石棺が、互いに入り組んで用いられている。それぞれの石棺やそれを収めた古墳には、互いに遜色ない状況から見て、そこには現代的な経済性や利便性だけでない世界を思わせるものであった。

石棺調査には近畿地方・中・四国や九州の各県はもちろん東海・関東・北陸に及んだ。これらを詳しく記すことは、既に報告したことでもあり割愛したいが、今回は、岡山県下で後期古墳石棺の実態を少し具体的に示す中で、その意味する事を事例として示したい。

(なお間壁忠彦が、昨年2017年12月28日病没いたしました。10月頃まで原稿は書いておりました。今後は葎子一人の作文とはなりますが、二人で歩んだ道ですので、今しばらくは四国遍路の「同行二人」で、続けさせていただきます。)

間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

謹んで間壁忠彦先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

編集子

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 167

地主神社敷地内遺跡 ～鹿児島県十島村中之島—— 秋田 雄也

原稿依頼をいただいたとき、バックナンバーを今一度、通して読んでみたのだが、先輩諸氏の経験談に学ぶことばかりで、20代半ばのペーパーに何が書けるのだろうかと考えた。そのような中、数少ない経験から引っ張り出してきたマイ・フェイバレット・サイトが鹿児島県十島村中之島にある地主神社敷地内遺跡である。私は現在、福岡県糸島市にて埋蔵文化財の専門職に就いているが、これは私が学生の頃に参加させていただいた調査である。

地主神社敷地内遺跡は弥生時代と平安時代を中心とした複合遺跡である。大隅諸島と南西諸島の間に位置するトカラ列島内の一つ、中之島の南西部、地主神社敷地内に本遺跡は存在する。中之島はトカラ列島内最大の島で面積約34.47km²、周囲約28km、島内最高峰の御岳は標高約979mである。調査地の地主神社は標高17mの台地に位置し、北には川が流れ、西は海に面している。中之島ではこれまで、宝神社敷地内遺跡のほか、タチバナ遺跡が調査されており、縄文晩期の集落遺跡が黒川式・一湊式・宇宿上層式など奄美から九州まで各地の土器と共に確認されている。

地主神社敷地内遺跡では縄文土器のほか、弥生時代中期から～終末期の九州西北部、九州中部、九州南部のほか、大隅諸島、奄美諸島など各地の土器や、腰岳産黒曜石、凹み石、扁平片刃石斧などの石器、平安時代の土師器、須恵器、越州窯系などを含む様々な遺物が出土した。調査組織は鹿児島大学、沖縄国際大学、西南学院大学の3大学を中心に、早稲田大学・伊仙町教育委員会の協力によるものであった。当時、西南学院大学大学院生である私はゴールデンウィークを利用して参加させていただいた。

調査は地主神社敷地内に3つのトレンチを設定して行なわれた。内1つは遺構・遺物の確認はなかったが、残り2つのトレンチからは上述のような遺物が出土した。トカラ列島は調査数が少なく、今回の調査で、これまで空白期とされて

いた弥生時代～平安時代の様子が判明した。弥生時代には南島（大隅諸島・奄美諸島）から九州（北部・中部・南部）まで、各地の土器が中之島において流通していたことを示し、平安時代には土師器、須恵器、越州窯系青磁が出土したことで、中之島は南島と九州の境界に位置し、交易の要衝であった可能性が高いということが考えられるようになった。

なお、調査中の宿泊場所は現場に近い民宿であった。毎日の現場終了後には現場報告会、勉強会、懇親会という流れもあり、調査経験のほとんどなかった私にとって、非常に良い学びの場となった。また、福岡では珍しい満天の星空や隣島の諏訪瀬島の小規模噴火で夜の暗闇の中、焼け爛れて真っ赤に染まる溶岩を見たことなど、現場以外でも普段経験することのできない体験ができた。このような様々な体験の中でも特に、地元の人々との触れ合いが大きかった。近所の小学生や住民が興味を持って毎日のように現場を訪れてくれた。また民宿に浴室が無いため、毎日近くの共同浴場を利用させていただいていたのだが、そこでも地元の歴史に対する興味の高さをうかがうことができた。さらに調査期間中、調査主任である新里貴之氏は中之島小中学校で調査成果を伝え、児童・生徒らが考古学に触れる良い機会となっていた。

調査現場となった地主神社は、地元の人々にとってみれば当たり前存在する神社であり、そのような場所から、空白であった島の歴史を埋める多くの遺物が出土するという事は驚きだったかもしれない。身近なところから文化財に興味をもっていただくということを再認識した経験であった。例えば、私自身も初めて考古学に興味を持ったのは、地元の中学校の裏山にある古墳がきっかけだった。いつも遊んでいた場所が古墳だと知った時は非常に驚き、どのような古墳なのだろうかと気になり、図書館で初めて発掘調査報告書を手に取った。

本調査では、日常的に地域住民が現場見学をしていたため、結果的に調査成果の還元ができていたが、普段の業務では難しい場面もある。そのような中で地域の人々に地元の歴史や文化財を伝えていくことを考えると思い出すのが、この地主神社敷地内遺跡の調査である。毎日現場を訪れる地域の人々や子供たちの好奇心にあふれるキラキラとした目が忘れられない。

（参考文献：新里貴之2017「トカラ列島の弥生時代と平安時代—中之島地主神社敷地内発掘調査成果から—」『一般社団法人 日本考古学協会第83回総会 研究発表要旨集』178-179頁、一般社団法人 日本考古学協会）

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは平尾和久さんです。



▲地主神社境内と調査の様子

考古学者の書棚

「時を盗む者 A THIEF OF TIME」

トニー・ヒラーマン／早川書房ミステリアス・プレス文庫(1990)

菱田 淳子

私の選んだ1冊は、少し古いアメリカのミステリです。作者のトニー・ヒラーマンは、直線的な州境が直角に交わるフォーコーナーズ(ニュー・メキシコ州、アリゾナ州、コロラド州、ユタ州の州境)を舞台とし、ナヴァホ保留地のネイティブ・アメリカンの警察官のジョー・リーブホーン警部補とジム・チー巡査をそれぞれ主人公としたミステリ作品を多数書いています。日本でも『死者の舞踏場』・『黒い風』・『魔力』・『話す神』・『ココロは待つ』・『聖なる道化師』などそれぞれ魅力的なタイトルの小説が訳されていますが、この『時を盗む者』では、リーブホーン警部補とチー巡査の両者が事件解決にあたります。

タイトルの“時を盗む者”とは、遺跡を荒らし、土器を掘り出す盗掘者のことです。そして、この作品には、考古学者や盗掘者も登場します。作中の観光客センターにポスターに「時間の盗人、壺荒らしはアメリカの過去を破壊する」とあります。また、他の箇所でも、「人類学者は廃墟の略奪者、墓地荒らし、古器物を威厳あるやり方で盗む教養ある人物」と皮肉られ、「何者かが先手を打って考古学者より先に古器物を持ち去ると考古学者は彼らを“時間の盗人”と呼ぶ」と書かれています。私はこの“時を盗む者”という言葉がずっと印象に残っており、久々にこの作品を読み返しました。

ニュー・メキシコ州のチャコ文化歴史国立公園内で発掘調査に携わるエリナー・フリードマン・バーナルが行方不明になります。エリナーとマクシー・デービス、ランドール・エリオットは契約で働く考古学チームで、一千以上あるアナサジ族の遺跡の中でどれが重要であるかを決定し、それらのだいたいの年代を推定し、出土品のリストを完成し、遠い未来に科学者たちが正確な年代を知る方法を見出すまで、どれを保存すべきかを決定する仕事をしていました。いわば遺跡地図を作製する仕事です。

行方不明になったエリナーはアメリカでは古代遺物保存保護法違反となる盗掘の疑いをかけられます。アナサジの多色装飾された陶器は美術品カタログに掲載され、オークションで、高額で取引され、コレクターの手に渡ります。死者や墓地を忌避するネイティブ・アメリカンは死者や墓地に近寄りませんが、キリスト教に改修した者やヨーロッパ系アメリカ人には盗掘もタブーではありません。

エリナーはアナサジ族の独特なタッチ・特殊な技法を持つ陶器の作者を特定し、作者の移動の足取りを追いかけて、仕事場や人物を特定する研究を進めようとしていました。アナサジ文化の謎の滅亡にもつながる有望な研究です。そして彼女は特徴ある陶器の破片を追いかける過程で時の盗人である盗掘者と接触し、行方不明になります。

未盗掘の遺跡は将来のために保存し、考古学者や自然人類学者が調査のための発掘許可を取るのは困難です。しかし、盗掘者に荒らされた遺跡の発掘許可は容易になります。そうした遺跡をめぐる状況の中で、研究成果や名誉への欲望が悲劇を引き起こしてゆきます。

ヒラーマンの作品では、アメリカ南西部の国立公園にもなっているナヴァホ保留地の荒涼とした雄大な自然の美しさが描かれ、独特の魅力があります。また、ネイティブ・アメリカンの景観を主人公に据え、その視点からこの地域に暮らすナヴァホ族やホピ族など様々なネイティブ・アメリカ人やヨーロッパ系アメリカ人のそれぞれの文化や階級、軋轢、社会問題などが描かれていることも、作品の奥行きを深めています。

関東では余り珍しくないでしょうが、私は毎日往復3時間かけて電車で通勤しており、かつては長い通勤時間を活用して次々と文庫本に読みふけていました。その時間をもっと有効に活用すべきだったと思います……

海外のミステリでは、1980年代流行した女性探偵シリーズ、自然人類学者が活躍するアーロン・エルキンズのギデオンのオリヴァー教授(スケルトン探偵)シリーズや、ダイナ・スタベノウのアラスカの少数民族の女性探偵のシリーズ。これらは直接仕事に直結しなくても、細部に注目し、手がかりを追い、問題を解決する術を学ぶ上で、なにがしかのプラスになっていたかもしれません。また、エスニシティ、ジェンダー、階層、あるいはポリティカルコレクトネス(PC)といった問題についても、かの地での状況・雰囲気や皮膚感覚的に感じ取れたような気がします。

しかし、海外ミステリの翻訳は最近では低調となったように感じます。そもそも出版業界では、電子書籍化の脅威のみならず、本という文化が日々衰えているのではないかという危機感を感じます。また、図書館という本を公共の利用に提供するシステム・場所にも様々な方面から風圧がかかっているようです。

私の仕事は、その大半は「発掘調査報告書」という本を作ることでしたから、「本の未来」について、当然関心があります。私自身はといえば、最近では体力も視力も衰え、通勤時に文庫本を読む頻度が激減しました。また、続々と定年を迎える同業者の方々の蔵書がどういふ運命をたどるのかも気になるところです。それでも、私は「本」というメディアの価値・可能性を信じ、関わってゆければと思っています。



アルカ通信 No.174

発行日 2018年3月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp